

手) 一言よろしいですか。では懇親会のときに。続きまして資格課程の事務長の高橋でございます。(拍手)

高橋 資格課程事務長 挨拶

高橋 資格課程事務長の高橋でございます。9月16日に資格課程の事務長として赴任してきて、ちょうど2カ月目にこの大会があったわけです。今回は学内の諸先生方、教職課程の先生方、それと事務方が力を合わせて、やっとここまで来ることができました。次年度以降もじつのある実質的な研究会として運営していけるように、私どももまた頑張っていきたいと思っております。いろいろお教をを請うことがたくさんあると思っておりますが、なにとぞ今後とも明治大学教育会へのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。(拍手)

司会 (伊藤) 新役員会の皆さん、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。(拍手) ではご退場ください。

それでは後半のプログラム、講演のほうに移らせていただきたいと思います。ここからは同じく教職課程教員の佐藤が司会をさせていただきます。

司会 (佐藤) こんにちは。後半の司会を務めさせていただきます佐藤英二と申します。文学部教職課程の准教授を務めています。後半はお二人の方から講演をいただくことになっています。まず最初は、教職課程のスタッフで同僚の齋藤孝教授です。私は常々「齋藤さん」と呼んでいますけれども、日本語の教育でよく知られていると思っております。

余計な話ですけれども、もともと齋藤さんのご研究は何なのかといいますと、ドイツのフッサールやハイデガーといった現象学の思想をフランスに紹介したメルロ＝ポンティという方の思想から身体論を読み取って、身体論をベースにした教育学、学習論を研究されている方です。それでは齋藤さん、よろしくお願いいたします。(拍手)

齋藤先生 講演

齋藤 齋藤です。よろしくお願いいたします。私は教職課程の教員ですので、卒業生が教師になっています。毎年100人は行きませんが、だいたい60人から80人くらいは教師になるということで、私の気持ちとしては、その人たちがネットワークをつくって勉強会をやって伸びていくというのが理想でした。

自分でも卒業生と一緒に研究会をやっていたりもしたのでありますが、どうしても大きな明治大学という母体で動くことはできない。今回、教職課程の念願である明治大学教育会が設立できたということで、社会的な広がりをもって教員養成につながっていくのでは

ないかと思っています。

たとえばどんなことが実際にあるかと申しますと、私はいま自分の学生たちと私立杉並学院中学高等学校に勉強しに行かせてもらっているのですが、そこの担当の学年主任の方が明治大学出身の先生です。当時の校長先生も明治大学出身ということで、受け入れてもらえたということがあります。明治大学教育会は現役の学生さんたちが学ぶ場としても、いろいろなつながりで広がりが出てくるということもありまして、このネットワークはぜひとも成功させたいと思っています。

現職の先生方や教育関係の方々、自分で自主的に何か勉強会をつくって、4、5人で勉強会をしていたとします。その勉強会のプロセスや成果をこの会で発表するということが、教育会の活動の中心になるのではないかと思っています。大学側が召集する会は、設立総会の今回がメインですが、次年度からは現職の先生が中心になっての、いろいろ小さな会の集合体というイメージを持っていただけるといいのではないかと思います。

かつて私は前島正俊先生の研究会で学びました。前島先生には明治の教職課程で講師をしていただいているのですが、実は私が大学院のころ、学校教育学というところにいまして、そのころ前島先生のご自宅で行われている研究会に参加させていただきました。そこで非常に感動しました。月に一度、教師が1カ月にやった教育実践を持ち寄るのです。

たとえばある先生が子供の描いた絵を40枚持ってきて、前島先生のお宅の居間に並べて、それをみんなで見て、「この授業はこうだったんじゃないの。この絵はここがいいね。」といった話をしたり、合唱をテープで持ってきて聴かせたり、作文を持ってきてみんなで読むということを毎月やっていらした。糸杉の会というのですが、その通信も出されています。

そういう会の熱気を身に感じて、教師というのはそういう生き方なんだと思ったのです。そうやって教師同士がお互いの子供たちについて語り合って学び合い、「次はこれを試してみよう」と言って、1カ月後にまた会ったら、「前回言ってもらったので、こうやったら、すごくうまく行きました」ということを、土曜日の夜に6時ころから11時ころまでずっとやっている。それが続けられている活動を見まして、教師の生き方というのは素晴らしいものだと思ったのが、僕が大学院のころです。それで私は教員養成の場に今、このようにいるのです。

やはり教師になるということは、一生が学ぶ人生であり、そしてそれを切磋琢磨して楽しむ。それと同時に1人の教員が育つということは、中学高校の場合は、かける200とか300です。毎日200人教えている状況です。ですから私は、学校の先生になる学生がいますと、その学生は1人と見ないで、中学生とか高校生がその後ろに100人、200人いると考えるようにしています。毎日200人教えますから、それはすごい職業だと思います。た

たとえば教師が100人集まったら、その200倍ということで、2万人ということになります。

そういう意識でいますと、教師を5000人輩出している明治大学の教職課程のネットワークができたなら、僕はすごい力だと思います。別に「明治大学にとにかく来てくれ」と言わなくても、先生がいい先生で、その先生が明治出身であるならば、明治受験者は自然に増えていく。ですから大学の政策、経済政策と申しましょうか、経営としても、僕は明治出身の先生たちの支援というのは大変、実質的なものではないかと思っています。

今日は私があれこれ話をするのも目的の一つではあるのですが、もう一つ現職の先生の方で、あるいは教育関係者の方で、この会が設立されたことをきっかけに、小集団でもいいですけども、これから自分で勉強会を主宰してみたいという積極的な意思を持っておられる方をこの場で募りたいのです。誰も出てこない大変寂しいことになって、今日は単に大学の公式行事として終わっていきます。それは寂しい。

私の考えでは、これは大学の事業ですけども大学主体の事業ではなくて、卒業生の方たちの広がり、活動というものを大学が受け皿として支える事業です。ですから、ここで研究会をしようという人が1人も出てないと、私としてはいままで明治大学で教えた時間が何だったのかという寂しい思いにとられるわけです。私がいま一生懸命語っているのは、出てくれるようにという祈りを込めてやっているわけです。

これは年齢を問いません。もちろん退職された先生でも構いません。前島先生なども校長先生を辞められています、そういう会を続けておられます。そういう人が1人いることによって、たとえば60代の方が1人いて、若い方がそのまわりにいるという風景もいいと思います。明治大学の学生さんはすごく教師に向いていると思います。私はここに勤めさせていただいて大変満足しているわけですが、なぜかというと、教師に求められる資質と、明治大学のカラーがジャストフィットだからです。

どういうことかということ、教師は生徒にエネルギーを与えなければいけない。あるいは生徒のエネルギーを受け止めなければいけない。それを受け止めるだけの身体、エネルギー、やる気というものが明治大学の人にはあるんです。

身体が生きている、エネルギーを発しているという感触は、明治大学はナンバーワンではないかと思っています。それを一番感じたのは、6、7年前の卒業になりますが、川西君という学生でした。この学生は得意なものが筋力だったんです。教員採用試験を受けたとき「得意なことは」と聞かれて、「腹筋」と答えて、残念ながらその年は落ちてしまいましたが、次の年に教師になりました。

彼が学生するとき、「駅二つ三つ分だったら、電車に乗りません。もったいないし、乗りません」と言いました。私が「すごいね」と言ったら、「明治ですから！」と言ったんです。私はそれを聞いたときに電流が走りました。要するに電車を使わずに歩くというのが明治なのか。「そういえば、おまえたちって、よく飲むよね」と言ったら、「明治ですから！」。「汗かくよね」「明治ですから！」。何でも「明治ですから！」で通るんです。

私はこれが気に入ってしまって、「このフレーズだ」と思った。学長室のスタッフのときに、創立 120 周年の記念行事があったので、新聞の広告を使わせてもらったり、電車の中吊りで「明治ですから！」というものを打ってみたんです。植村直己さんの、凍傷にただれた顔でにっこり笑っている顔で、「明治ですから！」とやったところ、OB の評判が大変よかったです。

その気持ちというのは何というのでしょうか、植村さんの凍傷にただれてもにっこり笑う、あの気持ちが僕は明治らしさだと思います。どんなときでもくじけないというか、人が嫌がることでも、がっと一步前へ進む。今つい一步前へ出てしまいましたけれども、男性の方はぜひトイレに……。感動しませんでしたか。私は感動しましたよ。あれを見たときに、これだと思いましたね。

女性の方は見られないのですけれども、男性トイレの便器のところに、「もう一步前へ！」と書いてあるんです。あれでずいぶん事態が改善されたのではないかと思います。ああいうところに「前へ」というスローガンを使ってしまう神経が、「明治ですから！」だと思うんです。トイレに「もう一步前へ!」。あれを見るたびに、この大学が好きだと思います。

僕が教えてみた感じでも、明治の学生さんは本当に人柄がよくて、エネルギーがあって、人に対して優しいし、強い。明治出身の教師の方と何人も付き合っているわけですが、すごいんです。5時に仕事が終わるのに、7時、8時まで毎日学校にいる。なぜか。その主な理由は、生徒に相談を持ちかけられるということです。

生徒がたとえば家のことで困っている。両親が離婚しそうだとか、何かいろいろなことがあります。相談を持ちかけられて、それに親身になって答えているので、毎日 7 時、8 時、9 時になる。もう大変です。そこまでしなくても、と思いますけれども、そういうふうに話しかけられてしまう資質がすばらしい。

あるいは部活動で言いますと、今教師をしている安田君という卒業生は毎週土日が試合なんです。対外試合を組むのも彼の仕事で、奥さんを放ったらかす感じで、毎週土日はバレー部の試合でずっと出かけている。それが楽しくてしょうがない。そういう部活の指導においても、明治大学出身の先生は非常に優れています。

いまの学校教育に必要なのは、学力だけではなくて、部活動などを通した人間教育だと思います。この先生と心でつながっている、あの先生に世話になったなと思う気持ちで、真人間になっていく。そういうところは家庭で教育できないところです。学力は塾で結構助けられますが、そういう深い心つながりは、学校の先生と部活をやると、ぐっと来ると思います。そのあたりが明治大学の強みなので、身体を張って「明治ですから！」と言うタイプが、僕はいまの日本の教育には必要な人材だと思います。

いま政府や文科省が、生きる力や教育再生と言って、免許更新制を始めましたが、免許更新制をやって、本当に生きる力をつけられる教師が育つならいいのですけれども、この効果はわかりません。でも僕は明治大学の「明治ですから！」というカラーでつながって

いる集団はいい影響を与え合うと思います。それが今回の狙いということです。

先生には学校内で太陽のように輝く存在になってほしい。ということで、前に出てくる覚悟は決まったでしょうか。壇上に出てきて、簡単なご挨拶からしてください。「何々学校に勤務している何とかです。今日からこういう感じの勉強会をやってみたいと思います。僕にメールをください。」恥ずかしいですね。それを期待しているわけです。「一歩前へ」です。

僕自身もそうだったのですけれども、人生で一番楽しい時間の一つは何だったかと思うと、20代、30代のころに研究会をやったのが楽しかった。土曜日の午後1時からやります。5時間くらい話して、そこから飲みに行く。たとえばメルロ＝ポンティを読んで、飲みに行くとか、学校へ見学に行って、授業を見て、その先生と一緒に話をして、そのあと飲みに行くというのを散々やったんです。自分の中でそれがすごくいい時間だったので、そういう時間を特に20代、30代の人にぜひ過ごしていただきたい。

実はいま少し世代間に断絶があります。ちょっと聞いてみましようか。塾でもいいのですけれども、とりあえず先生をやっている方、どのくらいいらっしゃいますか。拍手をしていただけますか。(拍手) こんなにいらっしゃるんですね。あとで壇上がてんこ盛りになりそうですね。楽しみです。

その中で自分は研究会というものを定期的に、1年に1回でもいいのですけれども、たとえば授業研究とか生徒指導とか、何人かで集まってやったことがあるという方は？僕の知っている例では、20年間3人でやっていた例があります。埼玉県の先生です。たった3人です。その3人が月に一度、もう20年やっているんです。そこへ僕は呼ばれて行ったのですが、その関係性はすごいことだと思います。研究会としても非常に優れている。本当に語り合える仲間を持っているのはすばらしい。

そのような話し合える仲間、研究会というか、そういうものを時折催した経験があるという方は拍手をしていただけますか？

(拍手) 半分くらいに減ったような感じですね。

いまぱっと見た感じ、50代以上の方はそういう経験がある方が多いと思います。断絶と言ったのは、いまの50歳以上の方のときは、民間の教育研究団体が結構元気で、手弁当で「ある学校を見学に行こう」と見学に行って、そのあとみんなで飲んだりしながら、話し合うことがよくあったと思います。

それは左翼的な運動との連動もあつたものですから、そちらが元気がなくなるに従って、教師の重要な集まり、つながりもだんだん衰えてしまった。いまの20代の、私が教えていた学生なども研究会に所属して、そこで必死になって学んでいるという人の率がものす

ごく少なくなってしまったんです。

これは大変な損失だと思います。日本の教育というのは実は教師の自主的な研究会、民間教育研究団体の支えがあって、はじめてこのレベルに達していると思います。たとえば必ず組合に入る、必ず研究会に入るとかいう段取りがない。特に中学高校は少ない。小学校というのは、なぜか知らないけれども、そういう研究会に入るものだという文化があって、日本では教員養成は初等教育が中心だったと思います。

中学高校は自由さもある反面、どこかの団体に所属するという習慣がない。たとえばいま私学適性検査を受けて私立に行きますと、たまたまその学校で一緒になった教科の先生とだけ話すという状況です。

ひどい場合には、公立で東京都に受かった学生がいて、英語で受かったのですけれども、その学校へ行ってみたら、英語の教員がその新任の女性1人だった。英語科がないんです。1学年が2クラスしかない。公立高校でもそういう状態がありました。そうしたら学べないわけです。新任がそのまま教えて、誰にも批判されずにやってしまう。そういう意味では大した実力もないのに、一国の主みたいにして過ごしてしまうという甘さもあります。

これまではお互いの授業を見ないようにしよう。見に行けば、見られてしまう。見られて、いろいろ言われると面倒臭いというので、ある種、教室王国みたいな状態がありえたわけですが、これからの時代はそうもいかない。もっと透明度の高い、いろいろなかたちで先生はマーケットにさらされてしまうと思います。どこの先生はどうなんだという情報もどんどん流れてしまう。

格付けランクではないけれども、学校に格付けランクがあるのなら、教師にだってあるのかもしれない。そうときに総合的にこの先生は信頼できる先生だ、学力面だけではなくて、総合的に人間として信頼できるというところが大事です。これが明治大学なんだというところをつくりたいと思います。

そのためには20代、30代の研鑽がどうしても必要です。20代の人だけでやるのもいいのですけれども、そこに前島先生的な、校長先生などをやった方がいて温かく、夏目漱石の木曜会みたいにやるのもいい。漱石先生はここに座っていて、学生に自由に討論させておく。ときどき話をする。そういうのもいい風景ではないかと思います。

あるいは自分が何か新しい試みの授業をやるから来て欲しいというふうに、明治大学教育会の人にネットで呼びかけるとします。ネットで呼びかけたら、何人かが集まって見学に来る。終わったあとに、その人たちから意見をもらって、明治同士ですから「明治ですから」と言いながら飲む。

いま飲み会もはやりませんが、明治だけは続けてほしい。ぐっと気持ちがまとまるかたちが欲しいと思います。自分がやったことに対する評価とかレスポンス、反応が欲しいわけです。仕事をする上で寂しいのは反応がないこと。生徒は反応してくれるから

いのですが、大人の同僚とか外からの目がないのは楽だけれども、ないならないで寂しいと思います。ですので、そういうものを見てくれる仲間がほしい。でも全くの他人が見ると、少し嫌な感じですので、明治同士だったら、少々のことを言ったとしてもお互いに関わりあっている。なぜかそういうことがあると思います。

私が全国に何かの仕事で行きますと、必ず「実は明治なんですよ」とみんな寄ってきてくれる。寄ってくる人、寄ってくる人がみんな、このまま飲みに行こうかと誘ってくる。実際に飲みに行くことも多いのですけれども、「このまま行きましょうよ」という感じの人しかいないんです。どうしても判で押したように、明治はこうなんだろう。女の人もそうです。女の人も、こう言っただけは失礼ですけども、ミッション系とは違うにおいを発している。「話せるな。ああ、気が楽になるな」という感じです。

そのあたりの気安さも含めて、明治同士は忌憚ない意見が言い合える。つい助けてあげたくなる、伸ばしてあげたくなるという気持ちを持つというのが、同じ大学を出た者同士のよさかだと思います。私もここに勤めて15年経ちますから、すっかり明治色に染まっていますので、そういう意味では「明治ですから！」を合い言葉に、切磋琢磨していくという集団の一員です。

さあ、時間がまいりました。私の前座的な話は終わり、「ご登壇願ひましょう」の世界です。よくよく心を決めて、さあ、いいですか。研究会を小さいのでもいいからやってみたいという方はどうぞお上がりください。パチパチパチ……。拍手) どうぞ。

年齢は問いません。思ったよりもいる。よかった、よかった、よかった。久しぶりだね。前にどうぞどうぞ。もっと広がってください。前に行ってください。こんなにいるよ。すごいね。いいですか。あとからちょろっと上がってきてもいいですからね。

ではここからパッパッパッと自己紹介をやっていきますので、所属と、どんな研究会をやりたいかを簡単に言っただきます。お願いします。

宇野 品川区にあります文教大学附属中学校・高等学校で国語科の教諭をしています宇野新之助と申します。昨年まで齋藤先生にゼミでお世話になっていまして、今年から専任で働いています。やってみたい研究会は、国語科なので、やはり国語の授業研究をしてみたいのですけれども、いまだにやはり大学生とつながりがありまして、それで教員を目指している方に対して、実際に現場に出る前に最低これだけは知っておきたいということをお伝えしたい。自分が伝えられることはそれくらいなので、伝えられるような場所を、先生方の協力もいただいてできたらと考えています。以上です。(拍手)

※ 連絡先

宇野新之助(ウノ シンノスケ) 2007年度文学研究科修了 文教大学附属中学・高等学校勤務

eメール：unoshin1588@yahoo.co.jp

齋藤 はい。パチパチパチ……。素晴らしいですね。

山岸 こんにちは。私立の大森学園高等学校という大田区にある高校で非常勤講師をしている社会科の山岸洋一と申します。やりたい研究は、学校の先生だけではないのですが、人に対して何かをするという職業では言葉が絶対に重要になってくると思っています。言葉は人を傷つけたり助けたりするということですので、国語科ではないですが、言葉の研究をしたいということです。

「詩のボクシング」というものがありまして、詩のボクシングの研究を少ししています。詩のボクシングというのは1対1で戦うのですけれども、お互いの詩を発表しあって、よりお客さんの心に来る詩を発表できるかという、詩のボクシングという大会があります。それについて仲間たちと研究したり、自分たちで詩のボクシングをしたりしています。

いま「詩のボクシング」という言葉を皆さんに出合わせただけで僕の仕事は終わったかと思えますけれども、帰って、詩のボクシングをネットで調べてみるなり、よかったら研究会に参加してみてください。よろしくお願いします。(拍手)

※ 連絡先

山岸洋一(ヤマギシ ヨウイチ) 2006年度政治経済学部卒 大森学園高等学校勤務
eメール：uwf0427@yahoo.co.jp

植村 横浜市立の東鴨居中学校というところで国語の教員をしています植村と申します。先ほど山岸君がお話ししたとおり、私も同じように詩のボクシングの会を2人で開きまして、私が現在チャンピオンでございます。皆さん、私よりも素晴らしい詩が書ける、そして素晴らしい朗読ができるという方がおりましたら、私をぶちのめしたいという方はぜひこの研究会に参加してはいかがでしょうかと思います。よろしくお願いします。(拍手)

※ 連絡先

植村悠人(ウエムラ ユウト) 2006年度文学部卒 横浜市立東鴨居中学校勤務
eメール：rainy_blue_moon@hotmail.com

大澤 いま現在、明治大学4年の学生です。大澤和仁と申します。私は来年度から千葉県にあります私立市川高校で国語科の教員として働かせていただきます。いま週に一度、市川高校に研修生として学校に行っているのですけれども、今週の教科会議の先生たちの話し合いの中で、もっと新しい授業をどんどん取り入れていくべきではないかという話し合いが出ていました。

僕はそれを外から見ていまして、先生たちの話を聞いていると、やはりほかの学校の情報が全然入ってこないという話をされていました。私も来年から働きますので、ぜひ先輩方、先生方の学校などに足を運ばせていただきまして、お互いの授業を見ると言いますか、新しい授業方法を研究していくような会を、私個人では絶対に無理だと思っていますので、

皆さんとともにやらせていただきたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。(拍手)

※ 連絡先

大澤和仁 (オオサワ カズヒト) 明治大学文学部 4 年在学中、2009 年 4 月より私立市川高等学校勤務予定

e メール : ad08gjex@icnet.ne.jp

小林 こんにちは。私は世田谷区立希望丘中学校で働いています小林隆介と申します。担当は英語科です。現在、大学の後輩と、あとは OB、OG を含め、20 代前半から 30 歳いかないくらいまでの年齢層で、約 10 名ちょっとで勉強会をしています。

その勉強会の内容は、1 カ月に 1 回行われるのですが、自分の得意分野、たとえば速読法とかメンタルトレーニングなど何か自分が得意なものを持ち寄って、そこで発表していただいて、そういうやり方もあるのかというのを学んで帰っていく。そして 1 カ月後、自分はこうだったというのを開いているのですけれども、ネタが尽きてきました。

あと大事なものは、若い人しか集まっていないので、できれば先輩方のご指導、先輩方のお話を伺えればと思いますので、ご協力していただける先生方がいらっしゃいましたら、私のほうまでご連絡いただけると助かります。よろしく申し上げます。(拍手)

※ 連絡先

小林隆介 (コバヤシ リュウスケ) 2006 年度文学部卒 世田谷区立希望丘中学校勤務

e メール : coba21coba@yahoo.co.jp

早野 神奈川の法政大学第二高等学校というところと、東京都の京華女子中学高等学校というところで非常勤をやっている早野未明と言います。教科は社会科です。私は学生るときから、一応、歴史教育者協議会に入っていて、教員になってからの全国大会といったところに参加しています。

やはり見ていて、年配の方が多く、若い人がすごく少ない。私は勉強する立場で参加するのですが、自分と同じ年の人が少ないと寂しい気もします。これを機にというわけではありませんが、民間の教育団体に入ってもらって、そういった会を盛り上げていくことが大事だと思うので、もし入っていない方がいたら、入ってほしいと思います。

あとはやはりそういう会にこだわらず、今回、明治大学教育会が立ち上がるようすけれども、僕もいま自分と友達で読書会などをやったりするのですが、それだけではなくて社会科とか教員同士ということで集まって意見交換をする。僕などはまだまだ 2 年目の新米なので、経験豊富な方から授業実績を聞くことが自分にとって勉強です。

教員というのは生徒以上に勉強しないといい授業はつくれないと思うので、とにかく勉強したいという気持ちがいまは非常に強い。なので、そういった勉強をしたいという方が集まって、勉強会をつくれたらいいと思っています。よろしく申し上げます。(拍手)

※ 連絡先

早野未明 (ハヤノ ミメイ) 2006 年度文学部卒 法政大学第二高等学校
e メール : hmimei@yahoo.co.jp

新井 こんにちは。新井淳一郎と申します。現在、千葉県我孫子市の久寺家中学校で社会科の教員をしています。昨年まで科目等履修生というかたちで、明治の教職課程で教員免許を取らせていただきました。現在、まだ教員になって駆け出し時代ですが、ほとんど部活ばかりをやっていました。バスケット部を持っていて、明治らしく「前へ」という作戦を出しています。シンプルな作戦なので、子供が本当に前に突っ込んでいく。ディフェンス、守りが待っているところに突っ込んでいって、それで今回は1回戦で負けてしまいました。

部活ばかりではなくて、中学校の教員なので、授業で勝負できる教員を目指しています。社会で、たとえば「中国の一人っ子政策ってすごいだらう。こういうところがあるんだぞ」とか、江戸時代のイントロ、導入の仕方、生徒を食いつかせる、生徒の目力をこっちに向かせる、わくわくどきどきという授業を目指して、たとえば授業のやり方とか、こういった授業のネタがおもしろいよといった研究会があれば参加して、研鑽して、そこで学んだことを目の前の子どもに還元したいと思っています。よろしくお祈いします。(拍手)

※ 連絡先

新井淳一郎 (アライ ジュンイチロウ) 2004 年度経営学部卒 我孫子市立久寺家中学校勤務
e メール : horagai1231@softbank.ne.jp

桐生 こんにちは。2007 年度に政治経済学部の政治学科を卒業しました桐生正史と申します。何を隠そう、1998 年に明治中学に入学して以来、10 年間の明治育ちです。僕が高校3年のときに野球部がこてんぱんにやっつけられた二松学舎大学附属高等学校で、いま非常勤講師で社会科を教えています。個人的には異業種間と言いますか、同年代の、通信とかいろいろな授業をやっている方と、「日本に一石を投じる会」という、かなり大それた恥ずかしいのですが、研究会みたいなものを行っています。

いま授業をやっていて、すごくおもしろいのが、最初は生徒と教師という縦の関係ばかりを考えていたのですけれども、生徒同士の横の関係性のすさまじさみたいなものを日々感じています。横の関係だったり、縦の関係だったり、斜めの関係だったりというものをいかに授業に組み込んでいくかということを考えられたらいいと思います。ぜひよろしくお祈いいたします。(拍手)

※ 連絡先

桐生正史 (キリュウ マサシ) 2007 年度政治経済学部卒 二松学舎大学付属高等学校勤務
e メール : m.kiryu0518@gmail.com

並木 こんにちは。江東区の大島中学校でただいま学習支援員として活動しています並

木勝啓と言います。来年度 4 月からは東京都の小学校に勤務することになると思います。いま皆さん大変すごい研究会をやられるようだと思ったのですが、僕たちは隣にいる彼も一緒にやっているのですが、大学を卒業して、2003 年くらいから月 1 回、読書会をやっています。

そこをまっすぐ行くと三省堂があると思います。三省堂を少し過ぎたあたりにタリーズコーヒーがあると思いますが、そこで月に 1 回集まりまして、みんな同じ本を読んできて話す。ただそれだけなのです。研究という大それたところまでいかななくても、読書の地盤と言いますか、絶えず読み続ける、絶えず本に線を引きまくる。絶えず話しまくる。「よみんちゅ」「かきんちゅ」「はなしんちゅ」みたいなことでできたらいいと思います。

「海人(うみんちゅ)」という T シャツを着ている人がいると思いますが、読む人と書いて「よみんちゅ」、話す人と書いて「はなしんちゅ」、書く人と書いて「かきんちゅ」、何でもいいと思いますが、そういう T シャツをつくってみてもいいと思います。そういうかたちで絶えず読書を続けていく、絶えず話していくということが、教員としての一つの地盤になるのではないかと考えています。

それから余談で、「一歩前へ」ということでしたけれども、僕の近くの駅のトイレはなぜか「半歩前へ」なんです。そこがまだもう少し踏み切れていないところだと思いますので、その 0.5 歩分を足すように、これからも読書会を続けていきたいと思います。読書会は今年で 8 年目くらいになります。だいぶ続けています。頑張りたと思います。この中でぜひ参加したいという方がおりましたら、参加していただきたいと思います。以上です。ありがとうございました。(拍手)

※ 連絡先

並木勝啓(ナミキ カツヒロ) 2003 年度文学部卒 江東区立大島中学校勤務
e メール: syukusai@hotmail.com

伊藤 こんにちは。私は伊藤隆則と申します。都立の北特別支援学校という、車椅子の人が多いのですが、肢体不自由の特別支援学校で教員をやっています。今年で 4 年目です。いま隣の並木から少し話がありましたけれども、読書会を学生のときから 8 年くらい続けてやっています。

いざ教員になってみると、教科ごと、学校種別ごとの研究会は結構ありますが、小学校の教員と特別支援学校の教員、特別支援学校の教員と高等学校の教員、高等学校の教員と中学校の教員、あとは国語科、社会科、私は社会ですけれども、英語科とか、異業種間と言うのでしょうか、異校種間、他教科間の交流が意外に少ないという感触があります。読書会でしたら、テーマは別に何でもいいと思います。小説を読んだりとか、新書を読んだりしてやっていますので、そういうことだったら異業種、他校種でも話はできます。

その話の中でほかの学校でやっていることで、これはうちの学校でもできるとかいうヒントをもらうことができると思います。いま 8 年やってきて、人数がなかなか維持できない。来ても、また減ってしまったりとかいうことがあります。いろいろなところで読書会

をやっているという話も先ほどありましたので、違うサークル同士との交流ができると、もっと継続的に安定して読書会もできていくかと思います。もし興味がありましたら、教育会のメーリングリストでも流してみたいと思いますので、よろしくお願いします。以上です。(拍手)

※ 連絡先

伊藤隆則(イトウ タカノリ) 2005年度文学研究科修了 東京都立北特別支援学校
eメール: takanori140@hotmail.com

萩原 皆さん、こんにちは。1993年入学、98年卒業の萩原正実と言います。いま現在、埼玉県にあります白岡東小学校の教員としてやっています。先ほどおやっと思ったかもしれませんが、明治大学の大学生活はとてもエンジョイしてしましまして、4年間では卒業できませんでした。別府ゼミで研究させていただいていましたので、今日はお礼ということでご挨拶と、あと林義勝先生、西洋史専攻、ようやく卒論で可をいただき卒業できました。その後お元気そうで、今日はとても安心いたしました。

齋藤先生から30代でもOKということで、私は35歳になります。いま現在、新任の先生がどんどん入ってこられまして、35歳はもう中堅どころということで、たくさん校務分掌が回ってきています。理科、安全教育、視聴覚とまだまだたくさんあるのですが、やはり若い先生方に少しは見本になれないかと思しまして、理科主任を頑張ってみようかと思っています。現在、同じ白岡町内の理科の校長先生に、単元ごとに指導案を見ていただいているところですが、小さいグループで、メンバーは校長先生と私の2名ですけれども、理科の研究を進めていきたいと思っています。

そしてもちろん町内の先生方、あと明治大学の卒業生、在校生の中からご支援、ご鞭撻、レスポンス、いま私はとてもレスポンスを欲しがっています。30代でもたくさんのご指摘等をいただきまして、若手にも、そして自分に対してもスキルアップできればと思しましたので、自分なりに白岡町内理科研究部を発足して、小さいですけれども、やりたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

※ 連絡先

萩原正実(ハギワラ マサミ) 1998年文学部卒 埼玉県白岡町立白岡東小学校
eメール: masami-h@mtj.biglobe.ne.jp

塩原 こんにちは。東京都立新宿山吹高校からまいりました塩原洋二と申します。実は私は根っからの「明治っ子」でして、中高大と明治を経験してきました。私立の経験なものですから、東京都立の学校はどういうものかと最初は懐疑的に思っていました。私がつくりたい会というのは、「東京都立の英語でも受験に通用する会」というものです。

これは一步間違えると非常に危険で、「都立の英語でも受験に通用するかい？」という懐疑的な質問文になってしまうのですが、実は山吹高校は結構頭のいい生徒が多くて、リーディング演習という、いま受験科目を持っていますけれども、早慶上智ならびに明治も受

験したい。実は明治も受験生に非常に人気で、「リバティタワーっていいよね」という声を聞いて、すごく嬉しく思います。そのような学校を目指せるような生徒が非常に多いので、ぜひ「都立高校の英語でも受験に通用する！会」を開きたいと思っています。メールアドレスは、yojijoy@msn.comです。

いまメモられた方はわかると思いますが、yojijoyというのは逆さまから読んでもyojijoyになります。こんなようなちょっと知的におもしろい会ができたらと思っています。よろしく願いいたします。(拍手)

※ 連絡先

塩原洋二 (シオバラ ヨウジ) 2006年度文学部卒 東京都立新宿山吹高等学校
eメール：yojijoy@msn.com

齋藤 どうもありがとうございました。希望とやる気に溢れている若者を見たところで、気分がよくなりました。では、こちらの壇上側が一步前に出て、「明治ですから！」と大きい声で言いますから、聴衆の皆さんも「明治ですから！」と答えてください。予行演習なしで、いまやってみます。では前へ。いいですか。右手はこうです、グッと握って。こちらが大きい声で「明治ですから！」と叫ぶと、そちらはもっと大きい声で「明治ですから！」と答えるはずです。山びこのようにやりましょう。では「せーの」で行きます。「せーの」

壇上 明治ですから！

会場 明治ですから！

齋藤 では拍手をして。どうもお疲れ様でございました。(拍手) 素晴らしい。10人も出てきてくれましたね。企画倒れかと思いましたがけれども、よかったです。

今日、現役の学生さんはどのくらい来ていますか。拍手してみてください。(拍手) わかりました。現役の学生さんがせっかく来てくれているので、最初、懇親会は現役はなしということだったのですけれども、「懇親会は食べ物が出る。食べ物が一番欲しいのは現役だ」と私が言ったところ、高橋事務長が快諾してくださいました。懇親会で食べてもいいということになりましたので、拍手してくださいね。(拍手)

私としては、いま出てきた学生さんのほかにも、やる気のある方はいらっしゃると思います。教職課程を取っている学生は研究会に参加していいということにしていきたい。そこで学ばせていただきたいと思います。ぜひこの明治大学教育会が盛り上がっていくように、よろしく願いいたします。以上です。お疲れ様でございました。(拍手)

司会 (佐藤) どうもありがとうございました。「“明治ですから” 研究交流のすすめ」、齋藤孝教授からのお話でした。

それでは次ですが、特別講演を寺崎昌男先生にお願いしたいと思います。寺崎先生は東京大学、桜美林大学、立教大学で長く教鞭をとられて、現在、立教学院の経営に携わっておられます。余計なことをお話しすると言われていたのですが、一つだけお話しさせていただきますと、寺崎先生はもともと福岡県の久留米市の呉服問屋のご長男で、呉服屋さんの経営が先生の大学時代に苦しくなった。そのまま大学に在籍するか、それとも大学を辞めてしまうかという瀬戸際に立たされたときに、大学とはそもそも何なのかということを考えさせられたそうです。

そこで先生の博士論文は、大学の自治制度の研究、大学とは何かということを探るものとなりました。そして大学の日本教育史研究、私を含めて日本教育史の世界にいざなった方というのは数多くいらっしゃると思います。それではよろしくお願ひします。(拍手)

寺崎昌男先生 講演

寺崎 こんにちは。悪い予感がしました。齋藤先生のあとの話は絶対に沈むと思っていました。やはりそうでした。いまのような元気のいいお話のあとに、私のような後期高齢者が話をするのは、いま私は非常にためらっていますけれども、こっちのほうが息抜きだと思って、しばらくお聞きください。

今日は大変おめでとうございます。おめでとうございますというのは二つありまして、一つは、こういう会が生まれたことはまことにめでたいことですねということです。いま齋藤先生からも、その前の別府先生からも納谷先生からも、皆さんからお話があったように、絆とそれからお互いに共に磨くといいますか、そういう会が絶対に必要で、それを一番つくりやすいのは同窓の会で、しかも現在、現職にいらっしゃる方々のつながりです。そういう点では今日のような会ができたことを、同じく私立大学にいる者としては、非常におめでたいことだと思います。

2番目は皆さんの母校である明治大学そのものの最近のご成功です。これは成功しておられますね。私は出身は国立ですが、そのあと私立に移りまして、私学を内側から見て、私学の問題がいまどんなにきついかというのを、嫌というほどわからせられました。明治大学が成功していらっしゃるというのは、あちこちで伺います。

自分で言うのもおかしいですが、立教も成功しています。たとえばオープンキャンパスで来られます。あのオープンキャンパスをやりますと、今年の立教大学のオープンキャンパスに参加した高校生の数は3万6700人でした。これは相当な数です。明治はきっともっと多かったのではないのでしょうか。これはいまの時代では奇跡的な数字です。少子化があと10年続きます。これは決して増えることがない。10年続く少子化を前にして、何人くらいの高校生、あるいは高校、中学の先生方が自分の大学に関心を持ってくれるか、大事なことです。

たとえば関西のほうのある大学では、教え子がそこの先生をしています。この前、電話をかけてきて、「先生、うちではこの間、オープンキャンパス第1日を行いました。来たのが17人でした」と言う。そういう大学も一方であるんです。つまりマスコミがよく言っているように大学の世界にも極端な両極化があって、明治大学や立教大学はその中のぐっと上にあるということです。

この前、リクルートが全国の大学のイメージ調査をやったのですが、それを見ていたところ、立教大学も女子学生に対する人気は非常に高い。これは全国で一番高いくらいですが、しかし明治大学は立教よりもはるかに高い項目がたくさんあって、しかもそれが関東圏、関西圏、九州圏、中国圏というふうに全国において高いのです。ですから六大学ということだけではなくて、全体としては一番大事な知られ方が広がっているというふうに思います。そういう点では大学のためにもおめでたいと、いま言うべきでしょう。

しかしいずれ、その勝負は10年あとくらいにきつと来ます。どこの大学も、10年間、同じ人気が続くとは限りません。そういう中でいま大学で教えていますが、今日、用意した課題の副題のところに「大学教育を含めて考える」と付けました。これはどうしてかという、われわれが大学で学生諸君と出会って直面している問題は、実は中高校、小学校の先生方が直面している問題と共通しているのではないかと、僕は絶えず思っているからです。共通した部分がたくさんある。そこのところを正直にお話するほうが、皆さんが大学は別ものだと思われないで済むのではないかと思います。

実際に教えていますと、私はいま直接、毎週、授業をしているわけではありませんが、ときどきあったり、昔のことを思い出したり、あるいは現職の方の話を聞いたりすると、小中高の教育問題と大学の教育問題は共通している部分が多々あります。そのことを手がかりにして、お話をしたいと思います。

まず第一は、いま申しましたように生き残りへの苦闘に直面していない大学はありません。旧帝大とか、あるいは非常に大きな私学、明治や立教のような現在、ブランドイメージをちゃんと持っている大学はあまり苦闘に直面しないでもいいのですが、それ以外のところで脅威に直面していないところはありません。この点は昔と非常に違います。

多くの大学で学生諸君に講義を頼まれたりして、「皆さんは、あなたの出た母校が、昔、こういう大学があつてね、と自分で言いたくないでしょう」。こういうふうに言うと、みんな大学問題も自分の問題だなんて思って聞いてくれる。そういう状態が広がっています。これは今後それでどう対応するかということがあると思います。

2番目は政府筋でいま考えていること、特に文科省およびその周辺の懇談会等で最近台頭してきているのは、学士課程教育をどう考えるかということです。卒業された方は、学士課程教育はぴんと来ないかもしれません。しかしこれは慣用語になっています。昔は学部の教育と言っていたものです。それがいまは学士課程教育という名前と呼ぼうというこ